巻　頭　言

21 世紀に入って，世界的に教育界の改革のスピードが加速している。しかも，その内容とタイミングは諸外国の方が大胆で唐突だ。

昨年の夏，ハンガリー語の研修を終えて帰国した友人から「ハンガリーでは，9 月から幼稚園（3〜6 歳）を義務教育にするらしい」と聞かされて驚いた。実際には家庭の状況により免除されることもあるらしいが，幼稚園最終年次の 5 歳児には 1 日 4 時間の教育が義務づけられた。

その 1 年前，現地の幼稚園長と話をしたときは，そんな話題は一切なかった。それどころか，「ハンガリーでは，小学校入学にあたって幼稚園の教師と親が話し合い，まだ子どもの成長が十分でないと判断すれば，1 年間遅らせる，つまり，7 歳で小学校に入学することもある。」と聞かされて，ゆとりがあるなあと感心したのだが，これは随分思い切った政策転換である。もっともハンガリーはかつての社会主義時代の名残りか，政府の権限が強大で朝令暮改を繰り返しているから，この制度も数年後にどうなっているかはわからない。

就学前教育の義務化は，PISA 調査で一躍脚光を浴びたフィンランドでも 2015 年 8 月から始まった。もともとフィンランドの初等教育開始年齢が 7 歳なので，日本と同じように 6 歳から義務教育がスタートするようになっただけともとれるが，基礎教育（初等教育）のカリキュラム改訂に合わせて，2010 年に改訂したばかりの就学前教育ナショナル・カリキュラムも再改訂された。フィンランドでは既に 2013 年から初期幼児教育（3〜5 歳），就学前教育（6 歳），基礎教育（初等教育: 7 歳〜）を全て教育省の管轄に置いているが，幼児期から始まる教育制度の体系化に本腰を入れ始めたといえるかもしれない。

しかし，教育制度の大胆な改革とは裏腹に，カリキュラムを支える教育哲学や思想は欧州の伝統的な考え方を踏襲している側面もある。例えば，ハンガリーの音楽教育は，コダーイ・ゾルタンが 70 年前に確立したメソッドを一貫して守り続けている。小学校（日本の 1〜4 年生に当たる）では基本的にハンガリーのわらべうたと民俗音楽しか扱わないし，幼稚園で（遊びを通して）学んだ歌を繰り返し，そこから旋律構造やリズムなどの音楽理論を教えていく。それが，自分たちの文化のルーツであり，ヨーロッパの最高峰の芸術を理解する「鍵」であるという揺るぎない信念をもっているからだ。SNS を介せば世界中のポップスがダウンロードできるこの時代に，あえて「良いものは良い」というスタンスを貫いているのである。

「21 世紀型スキル」に代表される新しい学力観の台頭で，コミュニケーション力，問題解決力，創造性（イノベーション），情報リテラシー，適応力など，様々なスキルの育成が学校教育に求められるようになった。教育の目的をどこに置くのか。学ぶこと自体を目的とするのか。手段としてのスキルに重点を置くのか。守っていくべきものは何か，変えていくべきものは何か。ヨーロッパでもアメリカでも日本でも，議論が続いている。

本学科の紀要が，ささやかでもこれらの議論に貢献できれば幸いである。

（初等教育学科長　永岡　　都）